



# 図書館における 情報探索と発見

図書館総合展 「学術情報発見サービスの表と裏」

# 本発表の立ち位置

- **図書館**という「場」での（学術）情報の探索・発見という視点から，学術情報発見サービスの表と裏について考える
- 想定している利用者の属性
  - 学生
  - （学術）情報に対する初心者
  - 図書館利用に対する初心者
- 図書館は，主に大学図書館と公共図書館を想定

# 図書館利用の課題

- 利用者（学生）は図書館をよく知らない
  - 図書館に何があるか知らない
  - 図書館のどこに，どのようにあるか知らない
- したがって，自分の知っていることだけで済ませてしまう
  - 例．自分のよく行く書棚だけを見て帰る
  - 例．OPACの検索結果の本の所在を確認してそれだけ借りて帰る
- 非常に狭い範囲の情報だけで問題を解決
  - 不十分で間違った結果を招く可能性

# 図書館のより良い利用のために

- 利用者は図書館をよく知る必要がある
  - 図書館に**何が**あるかを知る
  - 図書館の**どこに**、**どのように**あるかを知る
- → 図書館利用教育の重要性
- 本研究の着眼点：「**セレンディピティ**」の活用

# セレンディピティ

- 偶然に**思いがけない幸運**を発見する能力、またはその能力によって得られた幸運。一般には単なる偶然の幸運とほぼ同等の意味
- 厳密には、それに気づくための**知識**や**観察力**が必要である
- 英国の小説家Horace Walpoleが、スリランカの昔話「セレンディップの三王子」（三人の王子が偶然と才気によって探そうとしていなかったものを発見する）にちなんで作った造語
- 科学の発見で多くの例：X線，ペニシリン，．．

# 図書館でのセレンディピティ

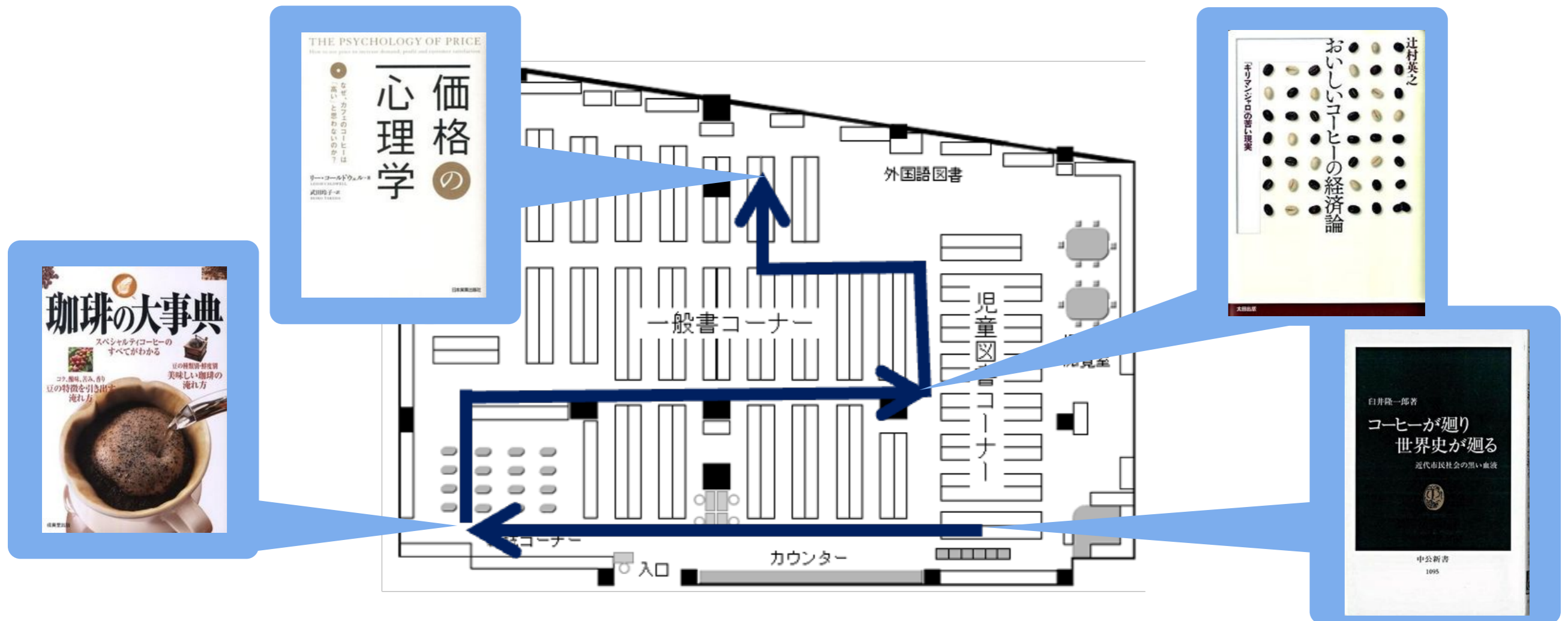
- 日常的に図書館や書店で思いがけない本を発見することがある
- 情報行動の文脈での研究事例
  - Saul Herner (1970) : **志向性のあるブラウジング**が思いがけない発見に
  - Daniel Liestman (1992) : セレンディピティが起こる道筋を提示
    - 特に「**情報の整理**」という偶然性とはかけ離れた方法がセレンディピティに繋がる
- セレンディピティの考え方を応用した図書館資料へのアクセス手法  
→ **トレーシング**

Saul Herner. "Browsing". Encyclopedia of Library and Information Science. 1970, vol.3, p.408-415.

Daniel Liestman. Chance in the Midst of Design: Approaches to Library Research Serendipity. RQ. 1992, vol.31, no.4, p.524-532.

# トレーシング

- テーマに沿った資料を収集し、入手経路を館内地図上に示す
- 利用者は館内地図上の経路にしたがって資料にアクセスをする





# トレーシングの期待される効果 1

- 利用者が普段向かわない書架で新しい興味のある資料を発見する





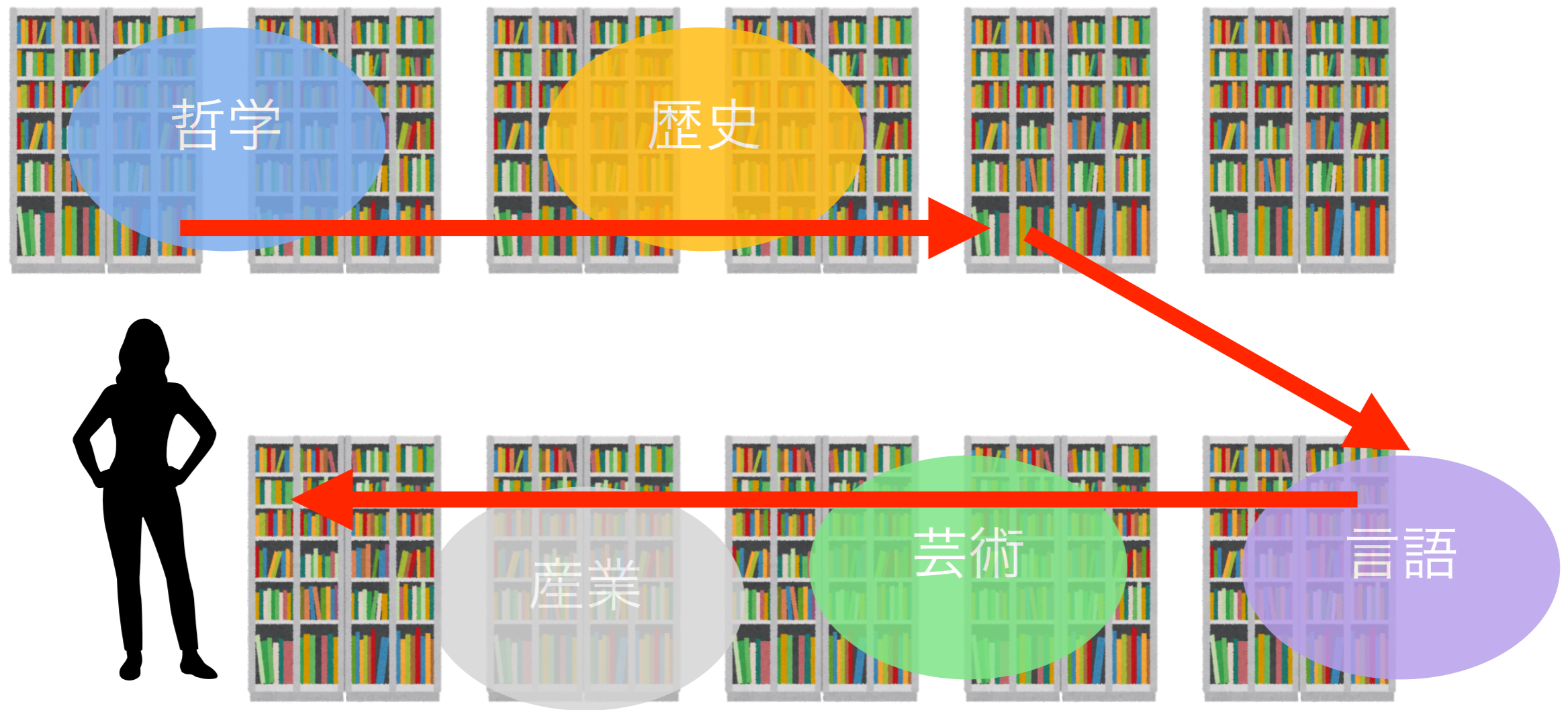
# トレーニングの期待される効果 2

- 指定された資料の途中にある棚で興味のある資料を発見する



# トレーニングに期待される効果 3

- 指定の書棚を回ることによって書棚の位置と本の関係を認識する



# 実験

- 目的：トレーシングで、新たな資料発見、図書館の配架に対する認識があるかを検証する
- 方法：調査協力者に2つのテーマでトレーシングを行ってもらう
  - テーマ1：コーヒー， テーマ2：紅茶
- 場所：公共図書館A
- 対象：当該図書館の利用経験のない大学生15名（男5， 女10）

# 結果 1

## 興味の広がり

- 興味ある資料を発見したのは15人中13人， 116冊
  - 116冊の内訳
    - 関心があり， その分野の資料を読んだことがある：29冊
    - 関心はあるが， その分野の資料を読んだことがない：59冊
    - 関心がない分野：18冊
  - 13人全員が新しい興味を発見
- ↑  
← 普段手に取らない資料の発見

# 結果 2

## 図書館理解

- 実験後の簡単なテストとインタビューの結果
- 調査協力者は通った書架を一部理解していた
  - 探す資料があった書架の近辺の理解
  - 気になった資料や目立つ資料がある書架に対する理解
- 興味関心の有無や分類により差があった
  - 「農業の本がある」 → 「61 農業」：認識しやすい
  - 「食べ物の本がある」 → 「38 風俗習慣. . . 」：難しい

# トレーシング研究のまとめ

- 主題に沿った本を選定し，それらの本が配架される書架を回る経路を設定し，図書館内を歩いて本を探す新しい情報アクセス手法として「**トレーシング**」を考案
- トレーシングにより，今まで読んでことがない分野や興味があっても手に取ることはなかった新しい分野の資料を手にとった
- トレーシングで通った経路の書架について，部分的ではあるものの，資料を目印にして理解していた
- トレーシングが利用者の**資料選択の幅を広げ**，**図書館の理解に繋がる**可能性が示された

# 図書館のより良い利用のために (再)

トレーニングで何が達成できた (る) か

- 利用者は図書館をよく知る必要がある
  - 図書館に**何が**あるかを知る
    - ← 資料選択の幅を広げ，知らなかった資料の存在を示した
  - 図書館の**どこに**，**どのように**あるかを知る
    - ← 書架を歩き回ること，うっすらと図書館を理解した
- 1テーマのトレーニングは図書館のかけらを理解可能にする
  - 多様なテーマのトレーニングを繰り返し行うことで図書館全体への理解につながっていく



# 学術情報発見サービスの表と裏を考える

- 疑問
  - **表**は使いやすいことが重要なのか？
  - **裏**の高度化を利用者に見せる／理解させる必要があるのか？
- Googleの一つの回答
  - **表**の検索窓は一つ，結果はリスト
    - → シンプルで使いやすい，目的の情報へは素早くアクセス
  - **裏**はブラックボックスでなんとかしてあげる
    - → (学術) 情報の全体像を得にくい

# 学術情報発見サービスの表と裏を考える

- トレーシング研究からの回答
  - 図書館の裏，すなわち資料の構成，配架への理解なくしては，利用者は図書館を自在に使い自分の知識や興味を構造化することはできない
  - オンラインサービスであっても同様ではないか？  
膨大な量のデータ，それを多面的に組織化した高度な裏のデータを利用者が使いこなすには，この裏への理解が（ある程度）必要
  - 学術情報の裏の理解を促す教育的な表の実現は可能か？  
→ トレーシングの考え方はそのためのヒントとなる可能性がある